繰り返し読むことの喜び

小説家 中島京子（なかじま きょうこ）

Essay 時の調べ

コロナ禍で家にばかりいた間、いくつかの本を「再読」した。

子どものときに好きだった本を多く読み返したのは、『ワンダーランドに卒業はない』（世界思想社）というタイトルの本にまとまった、児童文学に関するエッセイを書くためだった。

あらためて読んでみて、圧倒的におもしろかったのはロバート・ルイス・スティーヴンソンの『宝島』だ。これは、1、2度読んだきりで、そのときは本当に楽しかったけれど、その後、また読むということをしていなかったので、40年ぶりくらいの再読だった。

こうなると、重要なところもほぼ、覚えていない。もちろん、「ベンボー提督屋」に海賊らしき男がやってくるとか、「死人の箱にゃあ15人――よいこらさあ、それからラムが一瓶と」という歌とか、ジョン・シルバーがいかに魅力的かということなどは覚えているのだけれど、物語がどう展開していったかすっかり忘れていて、初読と同じくらいワクワクして読み進んだ。

次々に新しい本は出てくるし、それらは本当におもしろそうだし、実際おもしろいから、読むのではあるが、ほんとうは2回くらいずつ読まないと、どの本もちゃんと頭に入らないのではないかと思う。少なくとも、私のぼんやりした頭には入らない。2回では足りないくらいだ。

エッセイ集に登場する子どもの本の中で、もっとも多く読み返したのはバーネットの『秘密の花園』だと思う。風邪をひいて寝込んだり、布団から出たくない寒い日などに寝床で繰り返し読んだ。それで、何十回も読んだから細部まで詳細に記憶しているかと思えば、そんなこともなかった。本当に、恐ろしいほど記憶というのはいいかげんだ。いまのところ、好きだった本を再読してがっかりした経験はない。

コロナ禍で再読したのは子どもの本だけというわけでもなく、ウクライナで戦争が始まってから、アンドレイ・クルコフの『ペンギンの憂鬱』を読み返した。クルコフはロシア語で書くウクライナの作家だ。日本文学に造詣の深い作家で、戦争が始まってすぐに、朝日新聞に寄稿文を寄せていた。あらためて読み直すと、初読の際とは印象が違った。初めて読んだときは、独特のユーモアや発想の奇抜さに惹（ひ）かれたのだったが、再読して、ウクライナが直面している現実の困難をリアルに描いている小説なのだと感じられた。クルコフに関しては『ウクライナ日記』も読み返す（というか、翻訳が出てすぐ読んだのだが、こちらがウクライナについてあまりに無知なので読み切れなかった）ことになり、私なりに状況を理解するのに役立った。ウクライナつながりで『ペンギンの憂鬱』に共通するものが感じられて、ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』も再読した。あらためて21世紀を揺るがす戦争のことを考えさせられた。

『ポータブル・フォークナー』という本が、池澤夏樹、小野正嗣、桐山大介、柴田元幸という、すばらしい翻訳陣で出版され（河出書房新社）、2022年の私の「再読ブーム」の掉尾（ちょうび）を飾った。これは、ウィリアム・フォークナーが描き出した架空の場所、ヨクナパトーファ郡を舞台にした小説の主要なもの（短編および長編の抜粋）を、描かれる事件が起こる年代順に整理して編集した一冊。もちろん、収録されている全部が私にとって再読なのではないが、フォークナーも若い時に好きだったので、新訳と丁寧な解説で読めて理解を深めることができたのは幸福な読書体験だった。

再読の楽しさは、より深く作品世界に浸りこめるところだと思う。時間さえあれば、再読と、未読の古典を読んで過ごしたいものだけれど、新しい本も魅力的だし、仕事の都合もあるから、なかなかそうもいかなくて、悩むところである。

略歴

1964年、東京都生まれ。東京女子大学文理学部史学科卒。出版社勤務、フリーライターを経て、2003年『FUTON』で小説家デビュー。2010年『小さいおうち』で直木賞、2014年『妻が椎茸だったころ』で泉鏡花文学賞、2015年『かたづの！』で河合隼雄物語賞、柴田錬三郎賞、歴史時代作家クラブ賞、同年『長いお別れ』で中央公論文芸賞、2016年日本医療小説大賞、2020年『夢見る帝国図書館』で紫式部文学賞、2022年『やさしい猫』で吉川英治文学賞、同年『ムーンライト・イン』『やさしい猫』で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。ほかに『イトウの恋』『平成大家族』『ゴースト』『キッドの運命』など著書多数。